

# 「ら抜き言葉」の研究概観

辛 昭静

## 要 旨

本稿では「ら抜き言葉」の変化と様々な要因との関係を概観し、「ら抜き言葉」の変化の様子及び方向を推察して見ることを目指す。そのため「ら抜き言葉」の変化に関わる要因を大きく言語内的要因と言語外的要因の二つに分け、今までになされてきた先行研究の結果を中心に「ら抜き言葉」の使用と様々な要因との関係を概観した。

まず、言語内的要因との関係においては、研究により、調査対象・調査方法・調査実施時期が異なっており、何よりも「ら抜き言葉」が完全に定着している表現ではなく、まだ変化が進行中の表現であることから、相反する結果が出ている。また、「ら抜き言葉」の使用に影響を与えている要因は一つに限られているわけではなく、語幹の音節数、動詞の活用の種類、肯・否定形などが複合的に作用していることが分かる。なお、変化が進んでいくにつれ、各要因間の影響力も変わってくる傾向もうかがえる。

一方、言語外的要因においては次のことが分かった。(1)「ら抜き言葉」の使用率の男女差については、研究によっては性別による使用の違いが認められたと述べているものも、一方で認められなかったという結果を報告しているものもある。また、語により反対の結果がでる場合もあり、必ずしも結果が一致しているわけではない。(2)年齢との関係からは「ら抜き言葉」は若い世代の方で、より多く用いられている表現であることが分かる。(3)「ら抜き言葉」の使用率は他の地方と比べ、特に北海道と中部地方、中国・四国地方、東北地方で高くなっている。しかし、度合いの差はあるが、もはや「ら抜き言葉」の使用地域が全国に広がっていることがわかる。(4)「ら抜き言葉」に対する印象及び受容態度調査からは、一般的には「ーレル」型よりは「ーラレル」型の方が高く評価されているが、同時に合理的な理由に基づく変化としての認識も広がっていた。また、「ら抜き言葉」は確かにその使用率を少しずつ高めていく最中であるが、その性格は今の段階では主に話し言葉として、なお場面と相手によって使い分けられている傾向を示している。

以上のことから、本稿の考察にみる限り、「ら抜き言葉」は若い年齢層・くつろいだ場面での使用を中心に、現在も変化しつつある表現であると同時に、その変化の方向は一時の流行というよりは、言葉の合理性に向かった変化、地方方言から共通語化を志向する変化であると解釈できる。

【キーワード】可能動詞化、「ーレル」型、「ーラレル」型、言語内的要因、言語外的要因

## 1. はじめに

言語は常に変化している。現代日本語も例外ではなく一例として、近年「ら抜き言葉」と呼ばれる現象が社会的にも大変注目を集めている。これは、本来「見られる」「寝られる」「来られる」となるものを「見れる」「寝れる」「来れる」と表現する、いわゆる一段動詞・カ変動詞の可能動詞化の現象を指すことである。

神田(1964)は、この種の可能動詞の成立について、(1)可能の助動詞「られる」の「ら」が省略された約音として成立したものであるという考え、(2)五段活用とサ変の未然形「さ」に付ける「れる」をそれ以外の動詞にも付けるようになったという考え、(3)あるいは五段活用からの可能動詞が有力なので、それにひかれて五段活用以外の動詞からも可能

動詞が作られるようになったという考え、などの説をあげ、どのようにして成立したのかははっきりわからないが、五段活用動詞からの可能動詞が有力であることが、この表現形の一般化の基盤になっているといえようと述べている(神田 1964: 85-86)。

「ら抜き言葉」の発生時期については、井上史雄(1998)を参照すると、早いところでは、文法学者松下大三郎(1878年生まれ)が、出身地静岡県の方言で「逃ゲレル、受ケレル、といふなり」と明治時代に書いており、また山形県鶴岡市出身の文法学者三矢重松(1871年生まれ)も故郷の方言で「起きれる」「受けれる」と言う、と記していることから、東海地方と東北地方ではすでに明治時代に生じていたらしい(井上史雄 1998: 4)。このことから「ーレル」型は、明治時代から方言として存在して

いたことが分かる。さらに、大正 13 年 (1924 : 361) 刊の松下大三郎の『標準日本文法』に「被動の助辞『られる』の『ら』を省略して用ゐるのは『起きられる』『受けられる』『来られる』を略して『起きれる』『受けれる』『来れる』という類だ。上一段、下一段、カ行変格皆そうなるが平易な説話にのみ用ゐる厳肅な説話には用ゐない」と記されている。小説にでてくる用例をみると、大正期の小説である『葛西善蔵全集』に「黙つて随いて来れないのか！」(兄と弟 大正 7 年) など、8 つの例が現れている(鈴木 1994 : 69-70)。また、小林多喜二の昭和初期の小説『蟹工船』(1929) の中に「朝起きれなくなった」という例があり、川端康成の『雪国』(1935) にも「遊びに来れないわ」という表現が書いてある(井上史雄 1998 : 9) など、大正末から昭和初期の用例が報告されている。

やがて戦後、急激な広がりを見せるようになったこの表現に対しては「日本語の乱れ」として批判する声も高く、1995 年の第 20 期国語審議会の中間報告でも「共通語においては改まった場での『ら抜き言葉』の使用は現時点では認知しかねる」と結論している。しかし一方では、「首都圏地域での一段動詞・カ変動詞における『レル』形の用いられ方は、しばしば取沙汰されるような日本語の“乱れ”とか、あるいは“誤用”として扱える範囲を越えてしまっているのではないか」(加藤 1988 : 126)、また、「ラ抜きことばの誕生によって可能の言い方が別になり、レル・ラレルという助動詞の機能はさらに軽減されて、受け身と尊敬だけの役割になる」(井上史雄 1998 : 13) といった「ら抜き言葉」擁護論も述べられている。

実際、「-レル」・「-ラレル」型は可能の意味以外にも「受け身・自発・尊敬」の意味を全部担っているわけなので、この「ら抜き言葉」がもっと普及し、全ての一段動詞の可能形にまで定着した場合、学習上も、また教授上も、大きな変化が予想される。

一般的に、言語使用には性別・年齢別・地域別・階層別などの多様な要因が関係していることから、言語変化が起こる場合も、そのような要因に影響されるということは十分予測できる。そのため、先行研究でも各要因と変化との関連性を探る様々な研究が行われてきた。以下、本稿では「ら抜き言葉」の変化に関わる要因を大きく言語内的要因と言語外的要因の二つに分けて、順にみていくことにす

る。今までになされてきた先行研究の結果を中心に、「ら抜き言葉」の変化と様々な要因との関係を概観し、「ら抜き言葉」の変化の様子及び方向を推察してみることにより、今後の日本語の未来はどうなるのかを占う一つの手掛りにすることを試みる。「ら抜き言葉」の変化の方向を明らかにすることは、今後の日本語の変化発展の方向を予測する上でも重要であろう。

また、「ら抜き言葉」として一般的によく知られているこの現象についても、研究者によって必ずしもその名称が統一されているわけではない<sup>1</sup>。本稿では一段活用動詞の可能形のうち、「見られる」「食べられる」「寝られる」のような形は「-ラレル」型、これに対し「見れる」「食べれる」「寝れる」のような形は「-レル」型という名称を用い、「ら抜き言葉」に関する研究を紹介して行くことにする。

## 2. 言語内的要因

「-レル」型が時代の変化とともに、かなりの割合で、日常生活の中で定着しつつあるということは、いままでの先行研究の結果からも十分立証されてきたことである<sup>2</sup>。このような「-レル」型の使用傾向の分析とともに、「-レル」型のなかでも「-レル」型がよく用いられる語と用いられにくい語があることから、語による使用率の差異に注目した研究<sup>3</sup>も同時に行われてきた。その結果をみると、「-レル」型の使用率には、動詞の音節数と活用の種類、肯・否定形が大きく関係していることが分かる。例えば、中村 (1953 : 593) は、「東京語でのこの傾向は、最初に一音節語幹の語の否定形、来れない・見れないあたりからまず初まり、やがて着れない・出れない・寝れないなどを襲い、肯定形をも生ずるとともに、ついで二音節語幹の起きれ・降りれ・受けれ・逃げれ・投げれ・喰べれ・立てれ・捨てれ・懸けれ、などを襲ったものではあるまいかと考えている。現在においてもなお、二音節語幹の語では『れる』が好まれるものと、『られる』が好まれるものとがあるようである」と述べている。

以下ではいままで行われてきた先行研究を、使用率と (I) 動詞の音節数・活用の種類、(II) 肯・否定形、(III) 子音の調音方法、(IV) 可能の意味、(V) 単純動詞と複合動詞との関係を中心に紹介する。

## 2.1 使用率と動詞の音節数・活用の種類との関係

本節では、言語内的要因のうち、動詞の音節数と活用の種類との関係についてふれている研究からみていくことにする。

まず、渡辺(1969)は(1)「行ける・見れる」のような可能表現形式はまず五段活用動詞において発達し、一段活用動詞・カ変動詞については、それより遅れて、いわば「行ける・読める」を雛形として作られ、(2)その場合は語幹音節の短いもの(「見る」→「見れる」、「寝る」→「寝れる」)のほうが、語幹音節の長いもの(「顧みる」→「顧みれる」、「受ける」→「受けれる」)に比べて、この型の形成が容易であったとしている(渡辺 1969: 20-21)。

「来る」と29個の一段動詞について、1979年1月～3月に、都内在住の中・高校生411名を対象に調査を行ったものには、岡崎(1980)がある。調査方法は可能表現の文例を創作し、それらの語の中で「ーレル」のついた言い方の用いられやすさ、用いられにくさがどのように認められるかという点について調査した。その結果、「ーレル」型の用いられやすさについては、たしかに「未然形の一音節である動詞に多い」が、やはりそのなかで上位を占めるのは、上一段活用に属するいくつかの語(例:「見る」「着る」)であって、のちに、カ変・下一段活用のような順でこれに続くのではないかとと思われると述べている。また、未然形が二音節以上の語——語幹と活用語尾との別がある語——にあっても、やはり上一段活用の語が優勢で、下一段活用の語の場合には、この種の表現はなかなか用いられにくいこと、殊に語幹が二音節以上にわたる語の場合には難しいことを指摘している(岡崎 1980: 69)。

中田(1982)は、1980年9月に都内出身の高校生190名を対象にし、現代東京語の一段動詞における「ーラレル」型から「ーレル」型への変化に関して、意味的な側面が働いているか否かを検証するための調査を行った。調査方法は、質問用紙に可能表現の文例を作成し、各自で回答を記入してもらい選択肢式を採った。その結果、音節数・活用の種類に関しては前述の岡崎(1980)同様、二音節上一段に属する語(例えば、「見る」)が最も「ーレル」型が用いられやすく、これにカ変(「来る」)、下一段(「寝る」)、三音節上一段(「起きる」)、下一段(「食べる」)の順で続くという傾向が確認されたと

述べている(中田 1982: 70)。

また、中田(1982)の方法にほぼ準拠する形で、東京語という地域の枠をやや広げ、1987年7月に首都圏に居住する女子大生230名を対象に、(1)一段動詞における「ーレル」型と「ーラレル」型の使用の実態と語による使用率の差異の調査、(2)五段動詞における可能動詞化の徹底の度合いの確認、(3)中田(1982)が試みてその有意性の認められなかった可能の意味と形式との関連の有無の再検証を試みたものに加藤(1988)がある。加藤(1988: 123-124)によると、一段動詞の可能表現における「ーレル」型の用いられやすさは、その音節数と活用の種類に深く関わっていることがあらためて確認されたとしている。しかしながら同時に、音節数と音環境は「ーレル」型の用いられ方にとって重要な要因であることは確かだが、絶対的要因として働いているとは考えにくいとも述べている(加藤 1988: 114)。

音節の短いものの方が「ーレル」型が進んでいるとしているものとしては、田中(1983)もあげられる。田中(1983: 310)は国立国語研究所の調査<sup>4</sup>の結果を分析し、「語幹が一音節で短いものの方が『見レル・来レル』となりやすく、語幹が二音節の『食ベレル』『起キレル』の類では、むしろ、この種の形よりも『食ベラレル』『起キラレル』といった、長ったらしい語形の方が選ばれている」と述べている。

音節数との関係については中本(1985)にも、「ーラレル」型から「ーレル」型への変化は、「着る」と「食べる」の比較において音節の短い「着る」のほうが進んでいると報告されている。

また山本(1984: 206)は、全国の小・中学校の児童・生徒を対象に、言葉の揺れの実態調査を行い、「ーレル」型は、動詞カ行変格活用(来れる51.9%)がいちばん高い回答率となり、上一段活用、続いて下一段活用の順に低くなっていること、それらの動詞は、一音節語幹語(例:来れる、着れない、出れるなど)から二音節語幹語(例:起きれる、食べれるなど)へと移ってきていることを指摘している。続いて山本(1985: 102)では、児童・生徒と同じ内容の調査を、その指導者に当たる付属学校教官にも実施した。その結果、「ーレル」型単独使用・「ーラレル」型単独使用<sup>5</sup>における小・中学校教官の格差が大きい語はいずれも、一音節語幹語で

あって、「ーレル」型の発生や成立が最初に行われた動詞の一音節語幹語に深くかかわっていることがわかると前述した岡崎（1980）・中田（1982）などと同じ傾向を報告している。また、この結果から小学校の指導者よりも中学校の指導者の方が、規範的な言語行動への自覚が強いことを示していると解釈している。更に山本は可能表現の実態について、1983年第2次調査実施<sup>6</sup>の際と同じ方法と内容をもって、6年経た1989年に第4次実態調査を行い、言葉の揺れの実態を明らかにするとともに、第2次調査から第4次調査の間にもどのような変化が起きているかの通時的研究を行っている。その結果、（1）第1次予備調査（1982）にあたって立てた〈「ーレル」型は、動詞の力行変格活用から上一段活用、続いて下一段活用へと順に広がっている〉という研究仮説を、第4次調査においても大筋において確認することができたこと、（2）それらの動詞については、一音節語幹語から二音節語幹語へと「ーレル」型がこの6年間で移って来ていることも確認できたことを報告している（山本 1989：197）。

東京語話者を対象にした200時間以上に及ぶインタビューで収集した自然談話資料を分析したものには、Matsuda（1993）がある。Matsuda（1993：16）はその結果として、語幹の長さは「ーレル」型の使用率とは強い反比例の関係を表わす、つまり、「ーレル」型は三音節語幹以下の動詞だけに現れるとしている。また「-i 語幹」の方が「-e 語幹」より「ーレル」型がより多く使われるとも述べている（Matsuda 1993：18）。

他に、音節数と可能形の関係について述べた研究には、木下（1997, 1998）がある。木下（1997：147）は、1995年1月～12月に採集されたテレビ番組で現れた「ーレル」型の167用例を分析した。その結果、「音節が少ない動詞ほど可能動詞化しやすい傾向があることは既に明らかになっていたが、今回見つかった用例は四音節語が多く、これから見つかる新しい可能動詞も、四音節語以上の語が多くなるものと思われる。これは三音節以下の頻度の高い動詞は、既に可能動詞化がかなり進んでいるためである」と述べている。続いて木下（1998：226）でも、1996年1月～12月に放送された番組から採集した「ーレル」型の292用例を分析し、「新たに用例が見つかるものは、音節数の多い動詞であることが分かった。これは、音節数が少ない動詞は、もう

ほとんどのものが可能動詞の用例が出現してしまっていることを示す。故に、音節数の少ない語は可能動詞化しやすく、音節数の多い動詞は可能動詞化しにくく出現が遅れる、ということが明らかになった」と結論付けている。

井上史雄（1998）も、「ーレル」型が使われている動詞について個々の動詞によって、「ラ抜き」になる程度が違おうとし、よく目にし耳にするのは、日常よく使われる動詞（例：「見れる」、「起きれる」、「食べれる」など）と短い動詞に多いと述べている。また一般的に短い動詞はよく使われる動詞でもあるから、使用頻度数の方が作用が大きいかと思っただけで、「ら抜き言葉」研究の結果によると、動詞の音節数の方が、要因として一番効いているようだと述べている（井上史雄 1998：9-10）。

上下一段動詞及びカ変動詞から派生する「見レル」・「来レル」などをB型可能動詞と呼んでいる渋谷（1993）も、「ーレル」型の使用率には動詞の音節数という条件が大きく関与していると考えた。また、他の条件（音節数など）が一定であれば、「ーレル」型の使用率は下一段活用よりも上一段活用のほうが高いことを指摘し、活用の種類が「ーレル」型の使用を規定する強力な制約条件であることは動かしがたいと述べている（渋谷 1993：192）。

一方、上述の研究とはすこし違う見解を述べているものに辛（2001）がある。辛（2001）は語による使用率の要因を調査するため、40個の動詞をインフォーマントに提示し、チェックしてもらった。その結果、音節数との関係においては、「ーレル」型の使用率は二音節語幹語が、「ーラレル」型の使用率は三音節語幹語が最も高いという結果が得られた。すでに先行研究で指摘されているように、この調査の結果からも、動詞の可能表現の「ら抜き」化は語幹の音節の短い動詞から進んでいることが確認できた。しかしながら「ーレル」型の使用率においては、一音節よりも二音節の方が、また、三音節よりも四音節の方の使用率がそれぞれ高いという傾向も同時に観察されたと報告している。続いて、活用の種類との関係においては、「ーレル」型は上一段で、「ーラレル」型は下一段で多く用いられており、その使用率は対称的であったことから、前述した先行研究でも指摘されているように活用の種類は「ーレル」型と密接な関係にあることがここでも確認できたと述べて

いる。しかし「一レル」型の使用率と音節数の関係は、「一レル」型が使われ始めた最初の段階では「音節数の短い方から長い方へ」と変化していたが、もはや現段階では変化が進行中のため、ある程度の影響はあっても絶対的な要因として作用しているとは言い切れないとも述べている。

以上、「ら抜き言葉」と活用の種類との関係については、下一段活用よりは上一段活用の方の使用率が高いということが明らかになっている。一方、「ら抜き言葉」と音節数との関係に関しては、多くの先行研究でその強い関係が立証されてきたわけであるが、時間の経過と共に、その影響力も少しずつ変わりつつあるといえよう。

因みに「ら抜き言葉」と同様のことが五段動詞の方でも確認できる。神田(1961:74)には「可能動詞の用例を年代別に分けて整理してみると、古い方には語幹が一音節の動詞が多く、新しい方には二音節以上の動詞も多くなっている」と記されている。続いて神田(1964:85)も、五段動詞の可能表現の変化をみると、可能の助動詞「れる」を付ける形から可能動詞への変化において、「『読む』『飲む』のような一音節語幹の動詞から始まり、年代が下がるとともに二音節以上の語幹の動詞にも広がって行ったようである」としている。また、申(2001:49)も「可能動詞化は語幹一音節のものから出発し、しだいに音節数を増やしていることがわかる。同様に、東京語で見られる一段動詞による可能動詞化も、たとえば動詞の語幹が一音節の『見レル』が、語幹が二音節の『食ベレル』、『起キレル』よりも先に可能動詞として現れていることから、五段・一段動詞を問わず動詞の語幹が一音節のものから発生し定着しやすかったと考えられる」と述べている。

このことから、動詞の言語変化は「音節の短いものからまず始まる」という仮説も立てられるだろう。なお、このような傾向の背景には、動詞の使用頻度数が関わっているとも思われる。つまり、井上史雄(1998)も述べているよう、一般的に普段よく使われている動詞は音節の短い動詞が多いが、変化が起こる場合も人々が日常よく使っている動詞、もしくは使い慣れている動詞からまず変化し始めると予想できる。しかし、これを裏付けるためには今後、動詞別の使用頻度数を客観的に調査し、それらと「一レル」型の使用率との比較を行う必要があるだろう。今の段階では単なる推測に過ぎない。

## 2.2 使用率と肯・否定形との関係

本節では「一レル」型と肯・否定形との関係についてみていくことにする。

まず、中田(1982)からみると、中田は、岡崎(1980)の調査で用いている動詞のうち、両研究で重なっている例を取り上げ、その結果の比較を行っている。例えば、中田(1982)の文例中、同じ二音節下一段語の「寝る」と「出る」をみると、否定形にした「出る」の方が肯定形の例である「寝る」より「一レル」型の使用率が高くなっている。しかし、岡崎(1980)の結果では、否定形の例である「寝る」が肯定形の「出る」より使用率が高い。同様のことが同じ三音節下一段語の「食べる」と「投げる」でもいえ、岡崎(1980)では共に肯定形ながら「投げる」が「食べる」より高い使用傾向を示しているが、中田(1982)では否定形にした「食べる」が肯定形にした「投げる」より高い。このことから中田(1982:70)は肯・否定形による語の使用傾向について、否定形の方が肯定形より「一レル」型が用いられやすいかという予想もたてられると述べている。

田中(1983:310-311)も、前述した中村(1953)の推定に対し、「日本語の可能表現は、古来、打消をともなった不可能表現主導の形で発達してきたものであり、現代においても、可能表現は不可能の形で用いられる場合の方が圧倒的に多い。したがって、『見レル・起キレル』の類が、不可能の形から生じたとするのは、妥当な推定である」と解釈している。同様に加藤(1988:124)でも、同じ音節数で同じ活用に属し、肯定・否定で対立する「寝る」と「出る」、「投げる」と「食べる」においても、やはり否定文の方に「一レル」型が用いられやすい傾向がみえる、否定文こそが可能表現の本流で、変化が起こる場合もそちらからまず変化し始めるということなのであろうかと述べられている。

しかし、Matsuda(1993:18)は、「一レル」型は否定形より肯定形で多く用いられると述べており、これは前述の中田や加藤の意見とは対立する。辛(2001)でも肯・否定形による可能表現の使用傾向を調査するため、アンケートに提示した40個の動詞のうち、「一レル」型は33個の動詞で否定形よりも肯定形の方に高く、「一ラレル」型は37個の動詞で肯定形より否定形の使用傾向が高いという結果が得られた。このことから「一レル」型への変化は、

肯定形がリードしていると結論づけている。

一方、渋谷（1993：192）は、「ーレル」型の用いられやすさと肯・否定形との関係について、「将来厳密にコントロールされた条件下において調査がなされた結果制約条件の一つに加えられるようなことがあるとしても、その強さはそれほど大きいものにはならないであろう」という意見を述べている。

ここで中田（1982）・加藤（1988）と辛（2001）の結果が異なるのは調査方法にその理由があると思われる。まず、中田（1982）は岡崎（1980）の結果との比較を試みているが、これには他の要因が関わってくる可能性があるため、2つの調査結果を単純に比較するのは無理があるだろう。一方、加藤（1988）は異なる語を用いて「ーレル」型の肯定形と否定形による使用率を比べているが、同じ音節数・活用に属する語であっても、動詞により「ーレル」型の使用率が異なるので、このような比較では肯・否定形による差なのか、語による差なのか曖昧である。これに比べ、辛（2001）は同じ動詞の「ーれる」「ーられる」「ーれない」「ーられない」の4つの形を比べている。そのため、より正確な結果が得られたと思われる。

以上、「ーレル」型と肯・否定形との関係については、ほとんどの先行研究が肯定形より否定形の使用率が高いと述べているが、Matsuda（1993）・辛（2001）はその反対の結果を報告している。そのため、今後も調査を続ける必要があると思われるが、今後はアンケート形式だけではなく、自然談話のデータを増やしていく必要があるだろう。しかし、可能形はそもそも自然談話の中ではなかなか現れにくい表現でもあり、特に肯・否定形は話題により、その出現頻度が左右される可能性も高いので、談話の話題と場面設定に特に注意を払う必要があるだろう。肯・否定形と「ーレル」型との関係を明らかにするためには、同じ動詞が可能の意味を表す際に、肯定形と否定形のそれぞれの場面において、どちらの可能形がより多く用いられるかという調査を行っていく必要があると思われる。

### 2.3 使用率と子音の調音方法<sup>7</sup>との関係

辛（2001）は、語による使用率の差が現れる要因として、語幹の最後の母音だけではなく、その直前の子音も「ーレル」型の使用率になんらかの影響を与えるのではないかという仮説のもとに、語幹内の最後の子音（網掛けで表示）を調音方法により、

閉鎖音（例：ki-ru）・鼻音（例：mi-ru）・摩擦音（例：yase-ru）・破擦音（例：toji-ru）・弾き音（例：kari-ru）に分け、さらに子音を含まない母音だけの例（i-ru）を加え、計6つのグループ<sup>8</sup>に分類した。その結果、「ーレル」型は語幹の最後の母音直前の子音が閉鎖音と鼻音の動詞が、「ーラレル」型は語幹最終音節が子音を含まない母音のみの時に多く用いられる傾向があることが分かったが、関連を検証するには至らなかった。したがって、調音方法は可能表現の制約としては働いていないか、働いているとしても非常に弱いものであると結論づけている。

また、辛（2001）は以上のような結果には調音方法のみではなく、他の要因が絡んでいる可能性があることも指摘している。例えば「弾き音」の場合は、「ーりる」形（例：「降りる」）と「ーれる」形（例：「忘れる」）の動詞しかないが、辛（2001）の調査の結果をみると、「ーりる」の場合は「借りれる」（81.8%）、「降りれる」（81.8%）、「借りれない」（77.1%）、「降りれない」（82.8%）のように「ーレル」型に対し、高い使用率を示している。一方、「ーれる」の場合は、「別れる」（12.5%）、「忘れれる」（14.6%）、「別れない」（11.5%）、「忘れない」（9.9%）のように極端的に低い使用率を示している。これについて、辛（2001）は音環境にその原因がある、つまり、「ーれれー」のように同じ音が2回重なることを避けるため、「ーられー」の形がより用いられていると推測できると述べている。

しかし、辛（2001）の他には語幹最後の子音の調音方法と「ーレル」型の使用率との関係に関する調査を行っている研究が見当たらないし、実際に辛（2001）の結果からも有意差を検証するまでは至らなかったことを考えると、今後調査語彙を変えたり、増やしたりの工夫を加え、より精密な検討がなされる必要があると思われる。

### 2.4 使用率と可能の意味との関係

「ら抜き言葉」研究においては、「ーラレル」型から「ーレル」型への移行に意味的な面が関与しているか否か、可能の意味と使用率との関連性を探る研究もなされてきた。しかし、肯・否定形との関係同様、研究によりその結果が必ずしも一致しているわけではない。以下ではその研究について紹介することにする。

中田（1982）は、形式上の相違が意味上の使い分

けを反映しているか否かを検証するためには、可能表現を意味・用法の上から分類しておく必要があると考えた。そのため、可能表現の意味<sup>9</sup>による使用傾向を調査したが、能力、受容、許容といった文脈の意味の差による「ーレル」型の用いられやすさは認められなかった。その結果から、東京語における「ーラレル」型から「ーレル」型への移行に関しては意味的な面は関与しないと結論づけている（中田 1982 : 69）。

一方、加藤（1988）は中田（1982）と共通の話<sup>10</sup>を取り上げ、中田同様の方法で可能の意味を三つの枠組みに分け、その意味の違いによる使用傾向を調査した。しかしその結果、加藤（1988）は首都圏地域における一段動詞の可能表現使用に関して、能力可能の方が受容・許容可能よりも「ーレル」型が用いられやすいという傾向があること、つまり「ーラレル」型から「ーレル」型に移行する過程で両者に意味の違いを持たせようという傾向があったことを消極的ながら認めておきたいと述べている（加藤 1988 : 123）。要するに、東京語における可能の意味と「ーレル」型の使用率の関係については、中田（1982）は否定しているが、加藤（1988）は弱いながらもそれを認めている。しかし、渋谷（1993）は、加藤（1988）の結論には問題があるとし、その理由としては（1）「着ル」については例外であるとしていながらそれがなぜ例外なのかを説明していないこと、（2）加藤（1988）は分析にあたり、「ーレル」型単独使用か、それとも「ーラレル」型と併用か、併用の場合はどちらを多用するかなどに注目して回答のグルーピングを変えているが、そうすると相関そのものが変化することから、このような状況においては、意味との相関はないもの（あるいは少なくとも未確認である）と結論すべきであろうと述べている（渋谷 1993 : 193）。

他に、可能の意味との関係について調査したものには、早野（1996）がある。早野（1996）は、千葉県松戸市で「うちの子供は、もう一人で服を着ることができる（質問文1）」と「この服は小さくなったけれども、まだ着ることができる（質問文2）」の2つの質問文で調査を行った。質問文1が能力可能、2は状況可能であるが、能力可能の方が状況可能よりも「ーレル」型の使用率が高いという結果が得られた。この結果について早野（1996 : 80）は「ーレル」型と「ーラレル」型の基本的な違いはス

タイトルの高低であるが、今回のようにやや意味の違いが認められる場合もあると述べている。

また井上史雄（1998 : 5）によると、方言では個人の能力が原因になるときの「能力可能」と周囲の条件に起因する「状況可能」で言い方を区別することが各地にあり、「ーレル」型は、この区別を表すために一部の方言で発達した可能性がある。江戸語・東京語において可能動詞がどのような動詞に見られ、また定着していくのか、その発達の過程をたどった申（2001）も、可能動詞は「否定形」の「状況可能」から発生し、その用法を他の可能表現との競合の結果、「能力可能」へと伸長をみせ、やがて「肯定形」の「能力可能」をも積極的にあらしめるようになるとし、あくまでも可能動詞の意味の主流は「否定形」の「状況可能」であることは動かさない事実であると述べている（申 2001 : 49-50）。

しかし、神田（1964 : 88）は、「一段活用系の可能動詞が、書きことばより話しことばで多く使われていることも、意味の違いよりも場面の違いを示すものであろう」と述べている。渋谷（1993）も「ーレル」型の場合は五段動詞の可能動詞から類推して成立したのであり、成立したときにはすでにモデルになった五段動詞の可能動詞の方で助動詞レルとの意味的な使い分けを失っていた<sup>11</sup>から、そのような条件のもとで「ーレル」型だけが意味的な使い分けに参加するような状況は、その形式にそれだけの性質が本来的に内在するのでない限り考えられないとし、「ーレル」型にはそのような性質は存在しないと述べている（渋谷 1993 : 193）。

以上、可能の意味と使用率の関係については、未だに、その関連性が明らかにされていない。特に前述した井上史雄（1998）も指摘しているように、また国立国語研究所（1999）の調査からも可能の意味により、地域別の可能形が変わってくる傾向を示していることから、可能の意味による使い分けは地域とも深い関係があると思われる。そのため、意味による表現の使い分けに関しては地域との関係も念頭に入れて今後、持続的な研究が要望される。

また、2.2 節の肯・否定形と同様に、可能の意味による使い分けの調査においても、一つの動詞が能力可能・状況可能の意味として使われる際、同じインフォーマントからその可能形がどう変わってくるかを調べる必要があり、それを自然談話のデータでとることは、容易なことではないと思う。そのため、

こういう調査には先にアンケートを実施し、そこから得られた結果に基づいて、実際の会話場面での使用傾向を確認していく方法が望ましいと思われる。

## 2.5 単純動詞と複合動詞との関係

Matsuda (1993: 19) は、単純動詞の他にも、複合動詞、動詞の使役形、助動詞の可能形の4つを比べたところ、「ーレル」型は複合動詞、助動詞、使役動詞には現れない、つまり、単純動詞にしか現れない<sup>12</sup>という結果を報告している。

一方、辛 (2001) でも動詞の項目に、単純動詞にとどまらず「飛び降りる」・「受け入れる」などの複合動詞を取り上げた。なお「見る」・「夢見る」と「降りる」・「飛び降りる」の項目は、単純動詞が複合動詞の使用率にどのような影響を与えるのかをみるため、意図的に設けたものである。このうち、前者は名詞+動詞、後者は動詞+動詞の組み合わせである。これは語の組み合わせによる傾向を調べるための試みである<sup>13</sup>。辛 (2001) はその結果として

(1) 複合動詞の場合も可能表現として「ーレル」型が使われる<sup>14</sup>、(2) その使用傾向は単純動詞の影響を受けている、(3) 単純動詞と複合動詞の可能表現の使用パターンはほぼ同じ傾向を示す、(4) 複合動詞の組み合わせによる差はみられない<sup>15</sup>、と述べMatsuda (1993) とは異なる結果を報告している。

このような単純動詞と複合動詞の関係の背景には、音節数のことも関わってくると思われる。大体、複合動詞は音節数の長い語が多いが、辛 (2001) が述べているように、変化がある程度進んだ現在の段階で音節数が使用率に絶対的な影響を与えていない<sup>16</sup>としたら、複合動詞の使用率が単純動詞の使用率に影響されることも十分あり得ることであろう。

以上、動詞のタイプと「ーレル」型との関係について、様々な先行研究を概観してきたが、研究により、調査対象・調査方法・調査実施時期が異なっており (稿末資料の研究一覧表参照)、何よりも「ら抜き言葉」が完全に定着している表現ではなく、まだ変化が進行中の表現であることから、時間の経過とともに相反する結果が出ていると思われる。また、「ーレル」型の使用に影響を与えている要因は一つに限られているわけではなく、語幹の音節数、活用の種類、肯・否定形などが複合的に作用していることが分かる。なお、変化が進んでいくにつれ、要因間の影響力も変わってくる傾向もうかがえる。

例えば、動詞の音節数は変化の初期の段階においては、「ーレル」型の使用率を決める重要な要因であったことは確かだが、現段階においては変化がだいぶ進んでいるため、殆どの音節数別の用例が報告されている。もはや音節数の「ーレル」型への影響も絶対的とは言いきれないと思われる。一方、相変わらず絶対的ともいえる影響を与えている要因としては動詞の活用の種類が挙げられる。この要因に関しては、変化の初期段階から現段階に至るまでの全ての調査結果が一致している。また、影響があるかどうか未だに解明されていない語幹最終音節の子音の調音方法による使用傾向と研究によりその結果が異なっている肯・否定形、可能の意味による影響なども、今後変化が進むにつれ、その影響力も変わってくる可能性は十分有り得るだろう。そのため、これらの要因についてはこれからも引き続き、調査を行っていく必要がある。

## 3. 言語外的要因

この章では、「ら抜き言葉」の使用に影響を与える言語外的要因に関して述べている研究を概観していくことにする。以下ではそれらの要因を使用率と (I) 性差、(II) 年齢差、(III) 地域差との関係、それから (IV) 「ら抜き言葉」に対する印象及び受容態度に分け、順にみていくことにする。

### 3.1 使用率と性差との関係

男と女の言葉が多くで社会で違っていることは、言語調査の結果よく知られている。例えば、Labov (1966) はニューヨークで発音の違いに関する研究をし、そこで社会的地位、年齢、人種、発話の状況という要因に加えて性を独立した変数として取り上げた。また、トラッドギル (1975) は、言語変化を引き起こすのは、どちらかと言えば男の方であり、しかしその変化が標準語の規範の方向に向って起こる場合は例外であって、そういう時にはどちらかと言えば女性の方が変化を引き起こすこと、言語変化はまず男が音頭を取り、女の方はいわば男の後をついて行くと述べている。井上文子 (1991) でも、人々は古い言葉を失い、次々に新しい言葉を獲得して行くが、新語の受容には男女の差が見られること、女性は標準的な新語については男性よりも早く取り入れることが指摘されている。以上を踏まえ、男女による使用の違いを調べることにより、「ら抜き言葉」の変化の方向が判断できると期待される。



「ら抜き言葉」の使用率の男女差については、先行研究によっては性別による使用の違いが認められたと述べているものも、一方では認められなかったという結果を報告しているものもある。また、語により反対の結果がでる場合もある。このように「ら抜き言葉」の性別による使用についての先行研究では、必ずしも結果が一致しているわけではない。

以下では先行研究の中で、まず男女による使用率の違いが認められた報告からみていくことにする。

「見レル」・「起キレル」表現に対し、国立国語研究所が東京と大阪で行った「大都市の言語生活」調査（1981）の結果、男女差については、いずれの場合についても男性の方が女性よりも「一レル」型の使用率が高いとしている。特に男女差の度合いは、東京・大阪ともに「起キレル」の方が著しいという結果が得られたと報告している。

山本（1984）は、伝統的用法と破格的用法が互いに拮抗して日常生活の中に共存している言葉のゆれの実態について、小・中・高・大学の児童・生徒・学生を対象に調査し、言語生活に基づく文法教育の在り方を考えていこうとした。その結果、男女差については、女子よりも男子の方が「一レル」型を積極的に使おうとしていると報告しており、6年を経た1989年の報告でも、女子よりも男子の方が「一レル」型を使おうとする意識が強いと述べている。

文化庁（1995）も全国16歳以上の男女2,212名を対象に「こんなにたくさんは食べれない」、「朝5時に来れますか」、「彼が来るなんて考えれない」表現を使うかどうかを聞いた。その結果、「食べれない」（28.8%：25.8%、男女順、以下同様）、「来れますか」（37.5%：30.7%）、「考えれない」（8.6%：5.2%）となり、男女間の比較からは3語ともに女性より男性の方の使用率が高かった。

また1986年と1998年の2回、群馬県の大学生を対象とし、規範意識の実態調査を実施した山県（1999：169）は、1986年の調査と比べ、「男性は全体に使用頻度が高くなるが、女性は二極化して、男女差は98年調査で大きくなる」と報告している。

他に男女間の使用率について述べた研究には、中本（1985）がある。中本（1985）は、東京語のゆれについての実態調査を1982年から1983年にわたって実施し、初年度の調査を二百人調査、次年度の調査を千人調査と名付けた<sup>17</sup>。調査の結果、動詞「着る」については性別による違いは小さいが、

「食べる」に関しては、10代の女性は男性よりも「食べレル」を使用する頻度が高かった。これは、前述した山本（1984, 1989）とは異なる結果である。

大阪市における、「一レル」型の使用度<sup>18</sup>に関して調査した井上文子（1991）も、30代以上では男性の方により多く用いられているのに対し、20代以下では逆に女性の方により多く用いられるようになったという現象をとらえ、これを、当地において、20代以下の世代ではすでに「一レル」型が標準形と認識されるようになった結果の反映であると解釈している。

さらに、「一レル」型を *improvement potential*(IP) と呼んでいる Matsuda（1993：15）によれば、「一レル」型の使用率において、性別による違いが存在し、女性の方が男性をリードしている。また Matsuda（1993）同様の結果を述べているものには、辛（2001）がある。辛（2001）は4コマ漫画にセリフを書き込ませる形で、10代後半～20後半の男女間の「一レル」型・「一ラレル」型の使用率を調査した。その結果、男性より女性の方の「一レル」型の使用率が高いと述べ、その結果に基づき、「一レル」型に対し、10代後半～20後半の若者の間では、共通語化を志向する傾向が広がっていると結論付けている。

一方、木下（1998：230）は、1996年1月～12月までに放送された番組で採集した「一レル」型の用例を分析し、「ら抜き言葉は、全ての世代のあらゆる職業の人間によって、ほぼ男女差なく用いられていることが分かる」と述べている。また、渋谷（1993：196）も「性差に関しては、年齢による使用率の違いなど、ほかのより強い制約要因がからんでいるためか、今までのところ相反する結果が出てきており、現段階ではその制約条件としての性格は不明とせざるをえない。しかし、もし制約条件として機能するにしても、それほど強力なものではあるまい」と述べている。

このように「一レル」型に対する男女間の使用傾向においては、調査により異なる結果が報告されており、特に年齢により違う傾向もみられる。そのため、性別による使用傾向の調査は年齢別のことも共に考慮し、今後研究を続けていく必要があると思われる。

### 3.2 使用率と年齢差との関係

本節では年齢による「ら抜き言葉」の使用傾向に

ついてみていく。

まず西尾（1973）は、国立国語研究所の調査（1951）と土井（1964）、土屋（1971）の調査結果を分析し、（1）この語法的な「ゆれ」は世代的な差とかなり関係が深いように思われる、（2）「来れない」「見れる」のような可能表現は、特に若い層ではすでに相当な勢力をもつに至っており、この大勢はおそらく今後も逆行するようなことはありえないであろうと述べている（西尾 1973：6）。

中学生・高校生・大学生の使用傾向を分析した山本（1984）は、（1）「ーレル」型のみを使用する、すなわち「ーレル」型単独使用では、中学生の使用率がいちばん高く、高校生、大学生になるにつれて徐々に減ってきていること、（2）「ーラレル」型単独使用では、小・中学生がほぼ同じ回答率でありながら高校生になると予想外に減り、大学生では横ばいの傾向を示していること、（3）「ーレル」型・「ーラレル」型両用では、中学生がいちばん低い回答率であって、高校生・大学生になるにつれて両用が目立って増えていること、（4）高校生・大学生になるにつれ、「ーレル」型と「ーラレル」型を、話し言葉の場や時に応じて適切に使い分けていることを報告している（山本 1984：211-214）。

また、国立国語研究所が 1974 年と 1975 年に実施した「大都市の言語生活」調査によれば、東京・大阪における「ーレル」型可能表現の使用に関する調査での「見レル」「起キレル」の使用率は若年層ほど「ーレル」型を使用する傾向が高いとされている。

中本（1985）も、「着られる」「食べられる」「来られる」は高年層において使用頻度が高く、一方「着れる」「食べれる」「来れる」は 20 代、10 代と年齢が下がるにつれて、使用頻度が高いという結果を得ており、また加治木（1996：61）も、第 10 回現代人の言語環境調査「日本人と話ことば」の調査から、「若い人ほどら抜きに抵抗がなく、20 代で『食べれない』に抵抗を持つ人は 3 割にとどまる」と報告している。

一方、大阪市における「起キラレル」・「起キレル」表現の年齢別の使用率について、井上文子（1991：16）も、「70 代ではオキラレルとオキレルとが拮抗しているが、オキラレルの方が多く、60 代において両者の割合が半々となる。50 代以下ではオキレルが急増し、若年層では 90%近い高率となっている」と述べている。

文化庁（1995）の「ーラレル」・「ーレル」型の年齢別の結果をみても、（1）「食べられない」は男女とも 20 代以上では 6 割以上を占めているが、男女とも 16～19 歳では 4 割台と低い、（2）「来られますか」も、女性の 60 歳以上では 69.2%と 7 割を占めるが、16～19 歳では「来られますか」が男性で 61.8%、女性で 52.4%と高く、この年代では「来られますか」を上回る、（3）また「考えられない」の場合も、男性の 16～19 歳だけが 7 割台であるが、その他の年代ではいずれも 8 割以上を占めている。

以上のことから、「ーレル」型と年齢との関係については、全ての調査結果が一致しており、「ーレル」型は若い世代の方で、より多く用いられている表現であることが分かる。

### 3.3 使用率と地域差との関係

国立国語研究所（1979, 1982, 1983）が実施した 8 枚の状況可能分布図<sup>19</sup>と 2 枚の能力可能分布図をもとに渋谷（1993）が「ーレル」型の使用度分布図を作成した。渋谷はその分析から、「ーレル」型は、奥羽北部、関東西南部～中部・北陸地方、山陰地方及び四国地方という、互いに不連続な地域で高い使用度数をもって用いられており、逆に奥羽南部から関東地方の大部分にかけて、また近畿全般から瀬戸内海沿岸、九州・沖縄地方にかけてそれほど用いられていないと述べている（渋谷 1993：186）。この結果に対し、井上史雄（1998：4-5）は、「北海道と中部地方、中国・四国地方などに分かれてラ抜きことばが使われているさまが見える。別の見方をすると、新開地北海道を別にすると、近畿地方をとりかこむ地域に分布している」と表現している。

一方、井上史雄（1997）は 1994 年前後に全国の 102 の中学校<sup>20</sup>に依頼し、中学生とその保護者の方にアンケートを実施した。その結果、「ーレル」型を使う地域が急に広がっている様子が見られ、もはや「ーレル」型が使われない地域はなくなっていた。特に四国・中国地方と中部地方の使用率が目立っている。

また、「ーレル」型についての抵抗感をきいた NHK 調査結果からも、79 年調査<sup>21</sup>では東京を含む関東で「ーレル」型を変だとする答えが特に多く、中部・中国・九州などでは少ないという結果が得られた。96 年調査<sup>22</sup>でも「ーレル」型の使用は地域差が大きく、関東や東京では抵抗が大きい、東北や中部、西日本の方では少ないと報告している。

文化庁（1995）の調査でも、（1）「食べられない」は関東と近畿の両地域では7割以上と高いが、四国では「食べられない」が51.7%、「食べれない」が43.8%とその差は小さい、（2）「来られますか」は関東で70.2%と最も高く、一方北海道では「来られますか」は43.8%にとどまり、「来れますか」（49.1%）の方が割合が高い、（3）「考えられない」はいずれの地域でも8割以上を上回り、とりわけ、関東、近畿、九州の3地域では9割を超えるとしている。

方言としての「ーレル」型について調査を行ったものには国立国語研究所（1999）がある。ここでは全国807地点で、各地点1名もしくは2名の1925年以前に生まれた男性を対象に調査を行った。その結果、主に中部地方、中国・四国地方、北海道、東北地方で方言として「ーレル」型が使われていることがわかった。しかし、東北地方では語によって違う結果が得られた。例えば、「起きることができ（状況可能）」の場合は「ーレル」型はあまり用いられず、「着ることができない（能力可能）」の場合は、「ーレル」型がかなり使われていた。全体的にも「ーレル」型の方言分布は動詞別と可能の意味、肯・否定形により若干の違いがみられた。

以上のことを総合すると、「ーレル」型の使用率は他の地方と比べ、特に北海道、中部地方・中国・四国地方、東北地方で高くなっているといえよう。しかし、これらの研究は、もはや10年～20年以上経っている調査をもとにしているが、「ら抜き言葉」のような例は時間の経過と共にその傾向も変わってくるものであることを考えると、今は随分異なる結果が得られることが予想される。実際に辛（2001）は、全体インフォーマントの出身地を（1）東京、（2）方言に「ら抜き言葉」がある地域<sup>23</sup>=地域Ⅰ、（3）方言に「ら抜き言葉」がない地域=地域Ⅱに分け、「ーレル」型の使用率に対し、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、3つの地域間の使用傾向には関連が認められなかったことから、「ら抜き言葉」はもはやほぼ地域差なく使われており、その変化の方向は共通語としての変化であると述べている。

以上から、「ーレル」型と地域との関係については、地方により多少の差はみられるものの、「ーレル」型は徐々にその使用地域を全国に広げていく様子を示していると分析できる。

### 3.4 「ら抜き言葉」に対する印象及び受容態度

田中（1983：305-306）は、土屋（1971）が都内の小・中学校の生徒を対象として調査したところ、『見レル・来レル』を『感じがよい』とした回答は、『見レル』が全体の15.9%、『来レル』が25.5%に止まり、圧倒的に『見ラレル・来ラレル』の方が支持されている。したがって、この種の言い方は、かなり用いられるものではあるが、必ずしも望ましいものとして迎えられてはいないようである」と述べている。しかし、土屋（1971）の調査以来、約30年が経っている現在において、人々の意識もずいぶん変わっていることが予想できる。土屋（1971）の結果を、現状にあてはめることは無理があるだろう。

また山県（1999）は、「ら抜き言葉」に対するイメージ（情的な意識）を客観的に捉えるため、井上史雄（1980）が方言イメージを評価するのに用いた16評価語の内、12評価語<sup>24</sup>を利用した。1986年度と1998年度の分析を比較した結果、情的評価がプラス（おおらか・素朴・柔らかい）からマイナス（きびしい・豪快・乱暴）に転じ、知的評価がプラス方向（都会的・近代的・歯切れがよい）で高くなっていると報告している。男女別の比較からは、男性は情的評価の低下、女性は知的評価の上昇が顕著であることが指摘されている（山県1999：176）。

他に「ら抜き言葉」に対するイメージ調査を行ったものには、辛（2001）がある。辛（2001）は、「ーレル」型に対する言語意識調査にSD法（Semantic Differential法；意味微分法）<sup>25</sup>を用いた。調査では、「食べられる」・「食べれる」という二つの可能表現に対象を絞り、インフォーマントが表現から受けることが予想される項目を20個の尺度<sup>26</sup>で整理した。その結果、「食べられる」に対しては、〈形式ばった〉・〈上品な〉・〈丁寧な〉・〈良い〉・〈正しい〉・〈標準的な〉などという印象を持っていること、「食べれる」には〈早い〉・〈活発な〉・〈新しい〉・〈明るい〉・〈はでな〉などという印象を持っていることから、可能表現としては「食べられる」を規範的なものとして、より高く評価していると述べている。また、評価尺度の因子構造を明らかにするため、因子分析を行った結果、「食べられる」と「食べれる」の因子の構造は第1因子と第2因子の順番が変わっているだけで、さほどの違いがみられなかったとしている<sup>27</sup>。ここで実際に「食べられ

る」と「食べれる」のうち、どちらの表現に対する規範意識が強いかを比較してみるため、20 個の尺度のうち、言葉の規範性と関係がある〈正しいー間違った〉〈ふつうのーふつうでない〉〈良いー悪い〉〈標準的なー訛っている〉の4 尺度の評定値を平均し、規範意識尺度と定義した。そして両表現の規範意識の平均値差を調べる *t* 検定を行った。その結果、0.1%水準で有意差が認められ、「食べれる」よりは「食べられる」の方をより規範的な表現として意識していることを示唆する結果が得られたことを報告している。しかし、一つの特定の例から受ける印象を「一レル」型・「一ラレル」型に対する全体印象と考えることはできない。そこで対象とする語を増やすとともにその選択についても、改善を図る必要があるだろう。

一方、「ら抜き言葉」を NHK の放送で使うことに対する抵抗感を調査した加治木 (1996) によると、66%の人が抵抗を感じている。「見れる」を「おかしい」と答えた人では 8 割、「おかしくない」と答えた人でも 4 割が NHK で「ら抜き」を使うことに反対しているという結果が得られた。これに関して加治木 (1996) は、自分自身は「ら抜き」に抵抗はないが、NHK が使うことには反対ということであると解釈している (加治木 1996 : 65)。しかし、この調査では、「NHK の放送では、1. 『見られる』を『見れる』という、いわゆる『ら抜きことば』は使わない方がいい、2. 『ら抜きことば』を使ってもかまわない、3. どちらともいえない、4. わからない・無回答」の4 つの選択肢を与え、インフォーマントに回答させているが、一言で放送といってもその内容は様々なので (例：ドラマ、ニュース等)、一概に判断することはできないだろう。また、先行研究の中では「一レル」型が使用場面と相手により、使い分けられている傾向があることを指摘しているものもあるが、この設問はその点に関してもまったく考慮されていない。

また、群馬県の大学生を対象に行った調査で山県 (1999 : 182-183) は、前述したイメージ調査と並行して「ら抜き言葉」に対する様々な捉え方をみるため、自由記述の項目を設けた。内容は6 カテゴリーで整理した。その結果、「ら抜き言葉」に対する平均的な意識は、「《文法的な誤り》」であるが、「《言語変化の産物》」として合理的な形式でもあり、使用は増加傾向にある。このため、場面による使い分

けを行い、下位の場面ではその存在を認めよう」とまとめている。特に約 10 年間の変化相で注目すべき点として「ら抜き言葉」を方言＝地方固有の現象と捉えることの減少があげられている。

一方、辛 (2001) もアンケートに自由記述を設け、インフォーマントが回答した内容を山県 (1999) が使った分類を参考にし、「A使用状況」、「B意識の仕方」、「C印象」、「D主観的性格付け」、「E客観的性格付け」、「F使い分け」、「Gその他」の7 つのカテゴリーに分類した。山県 (1999) と異なる点は、山県の「性格付け」となる部分を、「主観的性格」に関する記述 (例：使いやすい) と「客観的性格」に関する記述 (例：受け身との区別ができる) に二分した点である。分析の結果は、「意識の仕方」<sup>28</sup>に関する記述が一番多く、その他にも、「ら抜き言葉」の合理性に関する記述が多かった。また、現在「ら抜き言葉」を使っている人の中でも、1) 公式の場での使用、2) 目上の人に対する使用、3) 書き言葉としての使用は控えているという回答が多いという結果が得られたと報告している。

ことばの合理性に関連しては神田 (1961) に、可能動詞が勢力を得て来た理由として、(1) 助動詞「れる・られる」には、可能以外に自発や尊敬、受身の意も表わすので紛れやすいという欠点があるので、その不明確さのために、次第に可能動詞にとって代られるようになったもの、(2) 「読まれる」「行かれる」より「読める」「行ける」の方が、発音しやく簡潔であるということ (神田 1961 : 74-75)、の2 点があげられているが、同様のことが「ら抜き言葉」の変化においてもいわれている。また、真田 (1983 : 88) は、この変化は同一形式による尊敬・受身表現との衝突を回避するという点からも支持されるとし、「見れる」を使っている人にとっては、それが言いやすく、かつ簡潔で論理的な表現とさえ感じられることが少なくないのではないかと述べている。以上のことは、言語変化の原因として「言葉の合理性」が重要な要因になっていることを示唆するものと思われる。

続いて、「ら抜き言葉」の使い分けに関しては、山本 (1984 : 209) にも、高校生以上に時と場に応じて、「一レル」型と「一ラレル」型の使い分けを適宜行っている実態を強くとらえることができると述べられている。また、92 年に NHK 文研で実施した「若者とことば」アンケート調査で、使い分けに

ついてきた。その結果、「見られる」だけを使う人は僅か 7%、「見れる」だけの人は 21%にすぎなく、両方を適当に使う混用派が 41%、改まった場面では「見られる」、仲間内では「見れる」という併用派が 23%という結果が得られた。

他に「ら抜き言葉」の使用場面を調査したものには木下 (1997) がある。木下 (1997) は、1970 年から 1996 年までの 25 年間の漫画における「見れる」表現を調査した。その結果 (1) 漫画において、「見れる」は男女とも話し手、聞き手が共に同世代である時に多く用いられること、(2) 異なった世代間で用いられる場合は、同世代間に比べて少なく、家族や友人間で使われる場合が多いことを指摘し、「見れる」がぐだけた会話で多く用いられていると報告している (木下 1997 : 93)。

しかし、自然談話を分析の対象とした Matsuda (1993) は casual style (27%) と careful style<sup>29</sup> (25%) における「ーレル」型の使用率には殆ど差がみられなかったと報告している。しかしながら、この結果については Matsuda 自身、より大量データを集め分析にあたってみれば、formal style での使用率が高くなるだろうとも述べている (Matsuda 1993 : 15-16)。

このように、「ら抜き言葉」は確かにその使用率を少しずつ高めていく最中であるが、その性格は今の段階では主に話し言葉として、なお場面と相手によって使い分けられている傾向を示している。しかし、実際の場面での使用実態に基づく報告は殆どなされていない。実際の場面において、「ーレル」型が場面によるスタイルの差として選ばれているか、つまり、改まった場面とぐだけた場面において、「ーラレル」型から「ーレル」型へとコード切り替え (code-switching) が起きるかに関しては、今後も研究を続けていく必要があるだろう。現に木下 (1997 : 147) では、この年に初めて見つかった用例として、元郵政大臣の自民党の小泉純一郎 (1942 年生まれ) 氏が使った「得れる」を取り上げ、彼のような立場、年齢の人が使ったということに、さらに興味を感じると述べている。また、社民党の福島幹事長も記者会見で辻元清美 (1960 年生まれ) ・元社民党衆院議員の参考人招致の出席について、「辻元氏は 10 日の参考人招致には出れない」と「ーレル」型を用いていた (2002 年 4 月 9 日)。彼らほどの公人の人々がマスコミに向かって答弁する際に、

「ーレル」型を用いていることは非常に注目すべき例であるといえよう。こういう実際の用例を集め、分析にあてることは、「ーレル」型の変化方向を探ることにおいて重要な手掛りになるだろう。

#### 4. おわりに

以上、「ら抜き言葉」に対する様々な研究を概観してきたが、「ら抜き言葉」についての先行研究では、必ずしもその結果が一致しているわけではない。「ら抜き言葉」の使用に影響する要因についても、研究により異なる結果が報告されており、その中には、未だに解明されていない要因もある。また、ほとんど質問紙による研究がなされており、「ら抜き言葉」の使用実態に基づく報告はあまり見当たらない。今後は、自然会話の資料を分析の対象とした調査<sup>30</sup>を増やしていく必要があると思われる。しかし、本稿では「ら抜き言葉」の使用に影響を与える要因を言語内的要因と外的要因に分けて概観してきたが、言語内的要因の調査方法としては、要因間のより精密かつ同等な条件下の調査が必要となり、自然談話だけでは十分な調査が行われぬとも思われる。そのため、「ら抜き言葉」の調査においては自然談話とともにアンケート調査を伴った方がより正確な結果が得られるだろう。アンケートから得られた結果をもとにし、それを実際の場面で検証していく方法により、調査方法として持っているお互いの欠点を補えると期待できる。また、現在「ら抜き言葉」を使用している人の中でも、場面と相手によりその使用を使い分けているという報告がなされているが、実際の場面においてきちんとした使い分けがなされているかどうかのことと、書き言葉と話し言葉における使い分けも調査していく必要があるだろう。そういうことを全部考えあわせた上で、「ら抜き言葉」全般の変化の様子が推察できると思うが、本稿の考察にみる限りでは、現在の「ら抜き言葉」の変化の方向は一時の流行というよりは、若者を中心とした言葉の合理性に向かっての変化であり、くつろいだ場面においてはもはや方言として位置付けられるよりは、共通語化を志向する変化であると解釈できる。

なお、この「ら抜き言葉」がもっと普及し全ての一段動詞の可能形に定着した場合は、「する」と「来る」を除いた一段動詞と五段動詞の可能形が共に同じ規則で作れることとなり、用語自体も可能動

詞と統一されることになるだろう。しかし、これがいえるためには、一段動詞の変化だけではなく、五段動詞の方はどういう傾向を見せるのかを調査してみる必要があるだろう。そのため、今後は五段動詞の変化の方<sup>31</sup>にも注目し、動詞の可能表現全体の变化の様子を推察していく研究が望まれる。

## 注

- 「ーレル」型に対し、山本は破格的可能用法、渋谷はB型可能動詞、Matsudaはimprovement potential(IP)、加藤は「レル」形、小松はレル型可能動詞、鈴木は「れる」型の可能表現という用語を用いている。
- 山本(1984, 1985, 1989)、木下(1997, 1998)等。
- 岡崎(1980)、加藤(1988)、Matsuda(1993)等。
- 1)「東京方言の実態調査のための第一次準備調査」(1949)ー都内の四谷税務署管内の147名を対象に実施  
2)「東京方言の実態調査のための第二次準備調査」(1949)ー都内の小学生と教師、成人を対象に実施  
3)「大都市の言語生活」(1974・1975)ー東京で639名を対象に実施(年齢別)
- 渋谷(1993)ではB型可能動詞専用、山本(1984)では、破格的用法専用・伝統的用法専用という用語を用いているが、本稿では「ーレル」型単独使用・「ーラレル」型単独使用と統一させている。
- 1)第1次予備調査(1982)  
2)第2次調査  
・調査対象:  
全国国立大学附属小学校(41校)6年児童4,642名、  
全国国立大学附属中学校(46校)2年生徒7,720名  
計 12,362名  
・調査実施期間:1983年1月~3月  
・調査方法:  
学級担任及び国語科担任の指導により、話し言葉を想定しながら、それぞれの選択肢の中で使用の言葉には○印を、不使用には×印を付して答える。  
\*選択肢の例  
A そんなに早く来れる人は少ないでしょう。( )  
B そんなに早く来られる人は少ないでしょう。( )  
3)第3次調査  
①高校生の可能表現の実態について  
・調査対象:山梨県立高校2年生1,386名、兵庫県立高校2年生370名 計 1,756名  
・調査実施期間:1984年4月~6月  
・調査内容と方法:第2次調査で行った内容と方法と全く同じ形式をもって実施  
②大学生の可能表現の実態について  
・調査対象:  
山梨大学教育学部2・3年次生359名  
都留文科大学2・3年次生147名 計 506名  
・調査実施期間:1984年5月~6月  
・調査内容と方法:  
小・中・高校生の調査と同じ内容と方法で実施  
4)第4次調査  
・調査対象:  
山梨大学教育学部附属小学校児童

5年生108名、6年生108名、  
山梨大学教育学部附属中学校生徒  
1年生176名、2年生166名、3年生173名  
合計 734名

- ・調査実施期間:1989年7月第2週の5日間
  - ・調査内容:第2次調査と同内容
- ここでの子音は、語幹最終音節の子音を指す。
  - 各グループを語幹の音節数により、一音節から四音節まで分け、各音節ごとに二例ずつ用意した。語を選定する際、母音もできるかぎり均等に入れるよう配慮した。しかし、摩擦音と弾き音の場合、一音節の例が見つからず、破擦音の場合は、一音節だけではなく四音節の方も適当な例が見つからなかった。また、そもそも語尾「ーる」の前の母音が「ーi」である語は「ーe」より少ないため、完全に同数の例を上げることはできなかった。
  - 1)能力可能:ある動作が動作主体の能力・意志によって実現されることを表した表現。  
(例)弟は水泳が得意で何メートルでも泳げる。  
2)受容可能:動作の対象である事物の具備する性質・状態について表された表現。  
(例)この川は汚くて泳げない。  
3)許容可能:ある動作が外的条件のもと、許容されることを表す表現。  
(例)このプールは会員しか泳げないことになっている。  
ー中田(1982)よりー
  - 一段動詞10語(「見る」、「着る」、「出る」、「寝る」、「降りる」、「入れる」、「食べる」、「のせる」、「投げる」、「かける」)、五段動詞8語(「吸う」、「行く」、「読む」、「蹴る」、「泳ぐ」、「話す」、「走る」、「帰る」)である。
  - 渋谷は加藤(1988)、神田(1961)を参照している。
  - 単純動詞は1044例中「ーレル」型は222例(21%)、助動詞は108例中0例、使役動詞は9例中0例、複合動詞は19例中0例となっており、「ーレル」型は単純動詞にしか現れなかった。
  - 辛(2001)では、「最小2つの実質的形態素が結合して、新しい文法的機能をもつ大きな単位を形成する時、そのまとまりを複合語とする。そしてその実質的形態素二つともが動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞として文法的性質をもつものを、複合動詞と呼ぶ」(『外国人のための日本語例文・問題シリーズ4 複合動詞』1987, p.1参照)という定義に従っている。また、複合動詞の構成要素別による分類(「動詞+動詞」「名詞+動詞」「擬態語/副詞+動詞」)のうち、辛(2001)では「動詞+動詞」「名詞+動詞」の2つの例を挙げている。
  - 辛(2001)では「夢見る」「飛び降りる」の他、「生き延びる」「組み立てる」「繰り上げる」「取り寄せる」「かき混ぜる」「受け入れる」の複合動詞の例が含まれている。その「ーレル」型の使用率をみてみると、「生き延びれる」(62.0%)「生き延びれない」(58.9%)、「組み立てれる」(39.6%)「組み立てれない」(34.9%)、「繰り上げれる」(30.2%)「繰り上げれない」(29.2%)、「取り寄せれる」(39.6%)「取り寄せれない」(30.7%)、「かき混ぜれる」(49.0%)「かき混ぜれない」(45.3%)、「受け入れれる」(11.5%)「受け入れれない」(10.9%)のように、動詞により使用率は異なるが「ーレル」

- 型が使われない動詞は一つもなかった。
15. 語による使用率の差はあるが、両方とも「ーレル」型が用いられている点では一致していた。
  16. 詳しいことは、本稿の2.1 使用率と動詞の音節数・活用の種類との関係を参照。
  17. 初年度は、東京在住 205 名を対象にした調査で、語形、文法、漢字の読み、漢字の用法、慣用句の意味の 167 項目について調査を行った。対象者は各年齢層から等分に選定した。調査は 10 数人の調査員が直接出かけ、面接調査したものである。第二年度は、初年度の調査項目を 57 項目にしばって、調査対象の人数を 1,037 名に増やしたものである。調査対象が多いことから、調査はアンケートによった。特に「ら抜き言葉」においては、初年度では一段動詞の 14 語（「煮る」、「見る」、「寝る」、「出る」、「起きる」、「食べる」など）、カ変動詞「来る」について、第二年度調査では「着る」、「寝る」、「食べる」、「来る」の 4 語についての調査が行われた。
  18. 資料：『大阪方言の動向—大阪方言の動態データ—』（真田信治・岸江信介、1990）
  19. 「着レル/ 着レナイ」、「見レル/ 見レナイ」、「寝レル/ 寝レナイ」、「開ケレル/ 開ケレナイ」
  20. 全国各県の県庁所在地と町村部から最低一校ずつ選定した。
  21. 「見れない」「来れない」「食べれない」の 3 語
  22. 「見れない」「来れない」「食べれない」「数えれない」「確かめれない」の 5 語
  23. 国立国語研究所の『方言文法全国地図』（1999）を参照すると、「ら抜き言葉」は主に北海道と中部地方、中国・四国地方、東北地方に分布している。
  24. 「標準語に近い」「正しい」「昔の言葉を使う」「なまりがある」を除き、知的プラス（都会的・近代的・歯切れがよい）、情的プラス（おおらか・素朴・柔らかい）、知的マイナス（地味・重い・不明瞭）、情的マイナス（きびしい・豪快・乱暴）の 12 評価語に対し、「見れる」「寝れる」「来れる」などの「ーレル」型の可能表現を聞いて、どのような印象を受けるか、1=あてはまらない、2=少しあてはまる、3=よくあてはまるのうち、該当するものに○をつけるように指示している。
  25. SD 法は、「たいせつなーたいせつでない」「よいーわるい」「ていねいなーらんぼうな」など、意味上対立する修飾語対を複数個用意し、その一つ一つの対を七段階の心理的な尺度にして、対象となるものから受ける印象を、インフォーマントに評定させ、その結果を分析する方法である。SD 法の利点の一つとして、同時に幾つかの意味の特徴を測定できることが挙げられる。
  26. 「良いー悪い」、「標準的なー訛っている」、「明るいー暗い」、「正しいー間違った」、「賢いーばかな」、「上品なー下品な」、「まともなーばらばらな」、「固いー柔らかい」、「男らしいー女らしい」、「形式ばったー形式ばらない」、「活発なー活発でない」、「早いー遅い」、「安定したー不安定な」、「はでなーじみな」、「ふつうのーふつうでない」、「まっすぐなーまがった」、「分かりやすいー分かりにくい」、「新しいー古い」、「好きなー嫌いな」、「丁寧なー乱暴な」
  27. 「食べられる」の場合、第 1 因子は〈新しいー古い〉〈活発なー活発でない〉〈早いー遅い〉など、表現の流行性を表す内容が中心になっており、「流行性」と

- 命名した。第 2 因子は〈安定したー不安定な〉〈まともなーばらばらな〉〈標準的なー訛っている〉など、言葉に対する安定性が中心になっていることから、「安定性」と命名した。一方、「食べれる」の方は、第 1 因子は〈安定したー不安定な〉〈ふつうのーふつうでない〉〈まともなーばらばらな〉などの安定性を表す内容が含まれていることから「安定性」と命名した。第 2 因子は〈早いー遅い〉〈活発なー活発でない〉〈新しいー古い〉など、言葉の流行性を表す内容が中心になっていることから「流行性」と命名した。
28. 「意識の仕方」：
    - 1) 自分や他人の使用への気になり方に関するものー「気になる/ ならない」「意識する/ しない」「違和感を感じる/ 感じない」などの判断
    - 2) 使用に対する規範意識に関する内容ー「正しい/ 間違っている」などの判断
    - 3) 「好き/ 嫌い」「賛成/ 反対」の判断
  29. Matsuda は、インタビューの会話は *careful style*、若年層によるグループセッション、そして食事時の会話を録音したものは *casual style* と呼んでいる。
  30. 筆者の知見の限りでは「ら抜き言葉」を扱った研究のうち、自然談話を分析の対象としているのは、次の 2 つしかない。(1) Matsuda (1993) は、78 名の東京話者を対象にした 200 時間以上に及ぶインタビューで収集した自然談話資料を用いて、「ーレル」型がどのぐらい浸透しているか、さらに「ーレル」型を推進させる条件は何かを検討している。(2) 木下 (1997, 1998) は、テレビ番組で採集した用例を分析の対象としている。
  31. 五段動詞の変化としては「飲める」「書ける」を「飲めれる」「書けれる」と表現する、いわゆる「レ足す言葉」と呼ばれる現象と、「飲められる」「書けられる」と表現する現象の二重可能表現に注目している。国立国語研究所 (1999) の「方言文法全国地図」4 を参照すると、これらの使用用例が一部の地域で報告されているが、今後このような表現が、単に地方方言にとどまるのか、それとも「ら抜き言葉」のように全国的な広がりをみせるのかに関しては、今後の動きを注視する必要があるだろう。

#### 参考文献

- 井上史雄(1997)『社会方言学資料図集—全国中学校言語使用調査(1993—1996)』東京外国語大学
- 井上史雄(1998)「ラ抜きことばの背景」『日本語ウォッチング』岩波新書 2-31.
- 井上文子(1991)「男女の違いから見たことばの世代差“標準”意識が男女差をつくる」『月刊日本語』6月号、アルク 14-18.
- 岡崎和夫(1980)『見レル』『食ベレル』型の可能表現について—現代東京の中学生・高校生について行った一つの調査から—『言語生活』NO.340、筑摩書房 64-70.
- 加治木美奈子(1996)「“日本語の乱れ”意識は止まらない—第 10 回現代人の言語環境調査から②—」『NHK 放送研究と調査』46 巻 9 号、日本放送出版協会 60-62.
- 加藤和夫(1988)「現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実態」『和洋国文研究』第 23 号、和洋女子大

- 学國文学会 110-129.
- 神田寿美子(1961)「現代東京語の可能表現について」『東京女子大学日本文学』16, 70-84.
- 神田寿美子(1964)「見れる・出れるー可能表現の動きー」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院 81-91.
- 木川行央・沖裕子・杉本武・石井直子・河崎裕子(1982)「東京都の方言分布」『日本語研究』5, 東京都立大学国語学研究室 48-63.
- 木下哲生(1995)「一段動詞およびカ変動詞の可能動詞化現象の現状(1970年以降の漫画と1993年以降のテレビ番組を資料として)」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』71, 76-116.
- 木下哲生(1997)「1995年のテレビ番組における一段動詞およびカ行変格活用動詞の可能動詞ーいわゆる『ら抜き言葉』の用例と分析ー」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』74, 125-152.
- 木下哲生(1997)「漫画における『見れる』の現状と用法の広がり」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』75, 61-98.
- 木下哲生(1998)「1996年に放送された番組における『ら抜き言葉』の用例と分析」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』76, 195-231.
- 国立国語研究所(1951)『昭和24年度国立国語研究所年報ー1ー』国立国語研究所
- 国立国語研究所(1981)『大都市の言語生活分析編』三省堂
- 国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』4, 大蔵省印刷局
- 真田信治(1983)『日本語のゆれ』南雲堂 86-89.
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要 第33巻第1分冊』185-199.
- 辛昭静(2001)「言語変化に対する意識と行動の比較研究ーら抜き言葉を中心にー」東京学芸大学大学院教育学研究科(未公開修士論文)
- 申鉉竣(2001)「近代語における可能動詞の動向」『国語と国文学』東京大学国語国文学会 39-51.
- 鈴木英夫(1994)「『ら』抜けことばーみれる、おきれるー」『国文学解釈と鑑賞』59-7, 至文堂 67-76.
- 田中章夫(1983)『東京語ーその成立と展開ー』明治書院 303-314.
- 土井洋一(1964)「ことばの『ゆれ』」『講座現代語』6, 明治書院 264-280.
- 土屋信一(1971)「東京都の語法のゆれー児童生徒言語調査結果報告(2)ー」『文研月報』9月号, 日本放送出版協会 35-37.
- 中田敏夫(1982)「可能表現変遷に関する一検証ー現代東京の高校生の調査よりー」『日本語研究』第五号, 東京都立大学国語学研究室 64-71.
- 中村通夫(1953)「『来れる』『見れる』『食べれる』などという言い方についての覚え書」『言語民俗論叢: 金田一博士古稀記念』三省堂出版 579-594.
- 中本正智(1985)「東京語のゆれについての考察」『東京都立大学人文学会 人文学報』173号, 164-168.
- 新美知昭・山浦洋一・宇津野登久子(1987)『外国人のための日本語作文・問題シリーズ4 複合動詞』荒竹出版
- 西尾寅弥(1973)「日本語教育における文法の問題ー文法的なゆれをめぐるー」『日本語教育』20号, 1-16.
- 早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態』おうふう 80-81.
- 文化庁(1995)『国語に関する世論調査』大蔵省印刷局
- 文化庁(2001)『平成12年度 国語に関する世論調査[平成13年1月調査] 一家庭や職場での言葉遣いー』財務省印刷局
- 松下大三郎(1924)『標準日本文法』紀元社
- 松田謙次郎(1988)「現代東京語可能表現の変化と変異」*Proceedings of Sophia Linguistic Society*, 3, 42-55.
- 松本哲洋(1990)「一段活用動詞の可能動詞化と日本語教育」『麗澤大学紀要』第51巻, 89-101.
- 安平美奈子(1992)「『見れる』という可能表現について」『NHK放送研究と調査』日本放送出版協会 34-35.
- 山県浩(1988)「方言使用に対する規範意識の実態ー群馬県の大学生の場合ー」『群馬大学教育実践研究』第5号, 39-75.
- 山県浩(1999)「群馬県の大学生にみる〈ら抜き言葉〉ー10年の変化相を中心にー」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第48巻, 167-188.
- 山本稔(1984)「話し言葉における『来れる』『見れる』『出れる』等の可能表現の実態と文法教育(3)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第35号, 205-214.
- 山本稔(1985)「話し言葉における『来れる』『見れる』『出れる』等の可能表現の実態と文法教育(4)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第36号, 101-108.
- 山本稔(1989)「話し言葉における『来れる』『見れる』『出れる』等の可能表現の実態の文法教育(5)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第40号, 189-197.
- 吉田健二(1996)「文法事象変化における語彙的拡散ー女子短大生の『ら抜きことば』の調査からー」『松蔭女子短期大学紀要』12, 63-94.
- 渡辺実(1969)「『行ける』『見れる』ー口語における助動詞複合の問題ー」『月刊文法』6月号, 明治書院 18-25.
- Matsuda, K. (1993) *Dissecting analogical leveling quantitatively: The case of the innovative potential suffix in Tokyo Japanese. Language Variation and Change*, 5, 1-34.
- Trudgill, H. (1974) *Sociolinguistics: An introduction*, Penguin Books, (土田滋訳 1975 「言語と社会」岩波書店)



## 資料

「ら抜き言葉」に関する研究を調査対象・調査方法・調査実施時期別にまとめると、表1ようになる。

表1:「ら抜き言葉」に関する研究一覧

研究者	調査対象	調査方法	調査実施時期
国立国語研究所(1951)	1)東京方言の実態調査のための第一次予備調査 ; 東京都四谷税務署管内の147名(東京出身70名、地方出身77名) 2)第二次予備調査 ; 都内(下町-旧浅草区、山の手-旧四谷区・旧牛込区)の小学生(300名)、教師(58名)、成人(48名)	記入調査・面接調査	1)1949年4月19日 2)1949年5月23日～6月3日(8日間)
国立国語研究所(1981)	東京で639名(年齢別) 大阪で359名(年齢別)	面接調査 (質問文及び選択肢)	1974・1975年
国立国語研究所(1999)	全国807地点で、各地点1名もしくは2名の1925年(大正末年)以前に生まれた男性が中心	調査員が現地に赴き、話者に直接質問	・1977年から1978年までの予備調査 ・1979年から1981年までの本調査 ・1982年の補充調査
土井(1964)	学習院大学の国文科専攻の学生60名	アンケート	
土屋(1971)	都内の小・中学生1,593名	選択肢	1971年
NHK(1980)	全国16歳以上3,600名(有効数2,639名)	個人面接法	1979年9月
NHK(1992)	東京近郊在住の大学生654名、 20代社会人150名、高校生105名	配付回収法	1992年
NHK(1996)	全国20歳以上の男女1,800名(有効数1,251名)	個人面接法	1996年3月7日～17日
岡崎(1980)	都内在住の中・高校生(筑波大学附属中学校、 巣鴨学園中学校・同高校)411名	選択肢	1979年1月～3月
中田(1982)	都内出身の高校生(東京都立深沢高校)190名	選択肢式	1980年9月
木川行央・沖裕子他(1982)	10代～80代までの111名 1)第1次調査 東京都23区以外を中心(調査地点は35地点、 調査者は19人) 2)第2次調査 23区内(調査地点は20地点、調査者は12人)		1)第1次調査 1981年5月～6月 2)第2次調査 1981年11月～12月
山本(1984)	1)第2次調査 全国国立大学小・中学生12,362名 2)第3次調査 高校生1,756名、大学生506名	選択肢	1)第2次調査 1983年1月～3月 2)第3次調査 1984年4月～6月
山本(1985)	全国国立大学付属学校 教官250名	選択肢	1983年1月～3月
山本(1989)	小・中学生734名	選択肢	1989年7月 第2週の5日間
中本(1985)	初年度は東京在住205名 次年度は1,037名	初年度は面接調査 次年度はアンケート	1982年～1983年
加藤(1988)	首都圏に居住する女子大学生230名	集団面接調査	1987年7月
松本哲洋(1990)	麗澤大学日本語学科1年生 (1988年度30名、1990年度24名)	アンケート	1988年・1990年
井上文子(1991)	1,128名(大阪市)	10代…アンケート 20代～70代…面接	1988年10月～ 1989年6月
Matsuda(1993)	東京話者78名	自然談話(200時間以上)	
文化庁(1995)	全国16歳以上の男女個人3,000名 (有効回収2,212名-73.7%)	調査員による面接聴取法	1995年4月6日～17日
文化庁(2001)	全国の16歳以上の男女3,000名 (有効回収2,192名-73.1%)	個別面接調査	2001年1月10日～ 1月28日
早野(1996)	千葉県松戸市の10代後半から60代までの 男女239名(男96名、女143名)	アンケート式	1994年
井上史雄(1997)	全国の計102の中学校に依頼し、中学生と その保護者(主に母親)約7,000名	調査表(中学生の場合は、 前半録音による指示つき)	1994年前後

研究者	調査対象	調査方法	調査実施時期
木下(1997)	番組出演者	テレビ番組 (167 用例)	1995 年 1 月～12 月
木下(1997)	漫画のセリフの中の「見れる」表現	1970 年～1996 年までの漫画 (326 例)	1996 年
木下(1998)	番組出演者	テレビ番組 (292 用例)	1996 年 1 月～12 月
山県(1986)	群馬大学教育学部学生 159 名	アンケート	1986 年 4 月
山県(1999)	群馬大学教育学部学生・群馬県立女子大学文学部学生 214 名	アンケート	1998 年 1 月・6 月
吉田(1996)	ごく一部を除き 18～19 歳の同一年齢の女子大生 167 名、神奈川県出身者が大半	アンケート	1996 年 10 月
辛(2001)	10 代後半～20 代後半の学生 192 名	アンケート	2000 年 6 月～11 月

## A research on the views ‘ra-nuki’ verbs

SHIN Sojung

### Abstract

This paper aims to postulate a relationship and direction of ‘ra-nuki’ verbs by establishing a relation between the change of ‘ra-nuki’ verbs (i.e. short potential verb forms) and other factors. The correlation between the rate of use of ‘ra-nuki’ verbs and other relevant factors were surveyed—focusing on result of established research—to create two criteria ; (1) an intra-language factor, (2) an extra-language factor.

#### (1) THE INTRA-LANGUAGE FACTOR

The subjects, method and implementation time for the investigation of each subject were different, and since ‘ra-nuki’ verbs are used for expression in accordance with change, contradicting results have been shown in the result of research. In addition, it was discovered that among the factors that have affected the use of ‘ra-nuki’ verbs, conjugation pattern of the stem, conjugation forms (i.e. negative forms・non-negative forms) as well as the length of the verb stem play a complex yet significant role.

#### (2) THE EXTRA-LANGUAGE FACTOR

- 1) There are contradictory results regarding the use of ‘ra-nuki’ verbs when examined in terms of gender difference.
- 2) Studies focusing on age demonstrate that the expression is more common with younger generations.
- 3) Although ‘ra-nuki’ verbs are used all over the country, the rate of use of ‘ra-nuki’ verbs is especially high in Hokkaido, Chubu, Chugoku, Shikoku and Tohoku districts compared with other districts.
- 4) Based on the result of an impression and attitude survey, it was found that the “- RARERU” type is more highly regarded than the “- RERU” type. However, at the same time, recognition of the change from the “- RARERU” type to the “- RERU” type, based on rational reasoning, was given. Moreover, although the rate of use of the ‘ra-nuki’ verbs is gradually increasing, it is still being considered as informal speech. As such, depending on the situation and the person being spoken to, the ‘ra-nuki’ verbs may or may not be used.

As discussed above, this paper focuses on the use of ‘ra-nuki’ verbs as a form of expression that is undergoing constant change. This paper will show that ‘ra-nuki’ verbs is not just a temporary fashion, but will become part of the common language due to rationality.

【Keywords】 formation of a potential verb, “- RERU” type, “- RARERU” type, intra-language factor, extra-language factor, short potential forms, long potential forms

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)